

・ 第一次派遣軍事監視要員隊員【坂 英樹 1尉】

～絆～

12月終わり頃から、任期を終えて帰国の途につくモニターがぼつりぼつりと出始めました。彼らはUNMIN設立当初からネパール入りしており、その当時のマオイストキャンプの設備は今と比べると段違いに貧相な状態でした。特に標高1800mに位置するロールパのマオイストキャンプは冬の真っ只中であり、寒さと風にひどく苦勞をしたそうです。あまりの寒さにテントの中で焚き火をしたり、UNMINセクター司令部とマオイストキャンプ間の要員のローテーションについても、まだヘリを使用できず車両で行っていたため、雪で途中までしか行けず5kmもの雪道を荷物を抱えて歩いてローテーションを実施したという話も耳にしました。

そういう労苦を共有し、同じ釜の飯を食べた者同士の別れはやはり感慨深いものがあるのだと思います。彼らの別れのシーンは、日頃「仕事の要領が悪いな。」とか「あまり仲が良くなさそうだな。」と思っているモニターでもなかなか心を打つもので、目を赤くして握手をしたり、しっかりと抱き合ったり、三者三様の挨拶をして別れを惜しんでいました。

UNMINは日本の自衛隊が参加する初の政治ミッションであり、紛争解決のための国連の新たな試みです。多くの課題や問題点が示された場でもあり、必ずしも順調にプロセスが進んでいるとは言い難い面もあって、かつて他の国連ミッションに参加したことのあるモニターの中には、このミッションのやり方や枠組みに対しかなり手厳しい意見を口にする者もいます。

しかし、私は彼らの別れを惜しむ姿を見て、ふとこういった世界との仲間作りこそが国際平和協力活動の重要な一面ではなかろうかと思いました。

UNMINの是非については歴史が判断することになると思いますが、多くの国からモニターがネパールを訪れ、そこで任務を通じ、時にはお互いに衝突し合いながらも絆を築き、そして、母国へ帰って行きます。この国境や政治的な主張を越えた友情という絆は、彼らにとってかけがえのない思い出となり、かつ、お互いを理解し平和に共存していく気持ちに繋がっていくのではないかと思います。そういった人と人との繋がりを作ることが出来る場を提供しているUNMINも、やはり国際協調という役割を地道に果たしていると言えるのかもしれない。

私もいずれ任期を終了することになります。日本に帰国する際には、私も友情という絆を胸に母国の地を踏みしめたいと思います。帰国の途につくモニターの姿を見送りながらそんなことが胸に去来してきました。

※ 注) 坂一尉は第二次派遣要員と交代し、平成20年3月18日に無事日本へ帰国しました。



坂1尉（左から1人目）